

明治の佐伯三青年 (24)

—— 龍溪・鳴鶴・鶴谷 ——

御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

明治十四年の政変

「国会期成同盟」の動きに合わせるように、全国的に小会派の政治結社がみられ、自由民権、国会開設の運動は、地方に波及しつつあった。大分県では、早くから竹田に貫填社、福沢のお膝元である中津では、正従社・画一社・共立社などの政治結社が生まれていたが、この頃では、佐伯でも青年有志の間で政談会が行われ、当時教職を退いていた佐藤蔵太郎が中心になって音頭をとっていた。

大阪から帰京した藤田は、相変らず多忙の日々を送り、「国会論」で得た名声もともなうて、夜になると誘われるまゝに宴会をはじめする有様で、そのもて方は三十歳に満たない藤田にとっては、絶頂

期であったかもしれない。しかし、若さは時として勇み足をもたらしした。

外はようやく寒さも和らぎ、春到来というのに、藤田は、今日ばかりは腰をさすりながら社を休んでいた。

「畜生、腰が痛いもうー」

「はい、酔冷ましの水」

豊吉はこう言って一杯の水を運び、じっと茂吉の眼を見つめていた。

「余り調子に乗るからですよ。みっともない」

豊吉の言葉に茂吉は返す言葉もなかった。

昨夜、例によって藤田は、料亭から次の料亭へと、時間の遅れを気にしながら、自家用の腕俵を急がせた。

「急げよ、留吉」

「合点」

ここまではよかったが、俵夫の留吉も大分酔っていた。そして、わがもの顔に夜の町を走る藤田の俵は、対向俵に接触し、藤田はもんどりうって転げ落ち、地面にたたきつけられて、ひどく腰を打ったのである。しかも相手の俵は、よりによってある宮家の俵でばつが悪かった。茂吉は、翌朝眼を覚ますと、昨夜の勢いはどこへやら、

つてを求めて詫びを入れる始末であった。

「お酒もほどほどにしないと、次は命取りになりますよ」

豊吉はくどくどと言わなかったが、かえってその一言が茂吉にはこたえた。それでも茂吉は、頭をかきながら机上の冊子を引き寄せ、眼はその方に引きつけられていた。冊子は、「私擬憲法」とあり、憲法草案であった。

この草案は、昨年来、矢野が交詢社の面々、中上川彦次郎・小幡篤次郎・馬場辰猪・小泉信吉・江木高遠等と研究討議を重ねた草案で、わが国で「憲法」と名のつく最初の私案であろうといわれている。

考えてみると、維新後薩長有志の専制を嫌う余り、民権運動が華々しく起り、近年では国会開設の請願が相次いでいるが、では民意による国会を開設するとして、国家をどのような立憲政体にするか、国家の根源については朝野とも手探りの状態であったから、政府の困惑もわかるが、大変な時代であったといえよう。

「茂吉は草案の頁をめくり、「うん、うん」と頷きながら、腰の痛みが治り次第矢野に会わねばならぬと思っていた。

藤田が矢野を訪れた夜、矢野は藤田の顔を見るなり、

酒の失敗をたしなめながらも、得意そうに憲法草案について意見を求めた。

「どうだ。それなりに体裁は整えているだろう」

「はい。福沢さんも大変喜んでおられました」

藤田は福沢の言葉を借りて応えた。

「わし等の研究はまだ内密にしておかねばならぬが、大隈さんも乗り気で上奏文の立案と頼まれた。時節は一刻とその方向に進んでいる」

「それは結構だが、政府の考え方がわからぬのもどかしい」

「いや、政府も慎重なのはわかるが、こう朝野から押しまくられれば、やがては決断せざるを得まい」

矢野は、その時期の到来に自信をもっている様子であった。

矢野は五月六日、政府に入ってから三年にして、太政官権大書記官兼会計検査院の二等検査官に栄進した。そして八月には、開拓使出納視察として出張を命ぜられたが、帰ってくる父光儀との別れが待っていた。

後年矢野は、この頃の父光儀のことを次のように述懐

している。「龍溪矢野文雄君伝」によると、

父君は、その知事だったとき、奏任の二等官であった。然るに先生は早くも父君と同等の地位に進んだのである。そのときの父君の喜びは殆ど想像に余った。

「わしの伴は三十前後にして、既にわしと同様の地位に進んだ」といって、喜ばれたそうであった。先生は五十年を経た今日でも、折に触れてはそのときの父君の姿を想い浮べて、父の至情をしみじみと辱なく感じ、「官に就いたからといって、これといふ喜ばしいこともなかったが、奏任二等になったときに、父が喜んでくれたときの如く有難いことはなかった」と述懐している。而してなほ惜むべきは、翌年先生が奏任一等に進まれたときには、父君はもはやこの世の人ではなかったことである。

文中「先生」とは矢野のことであるが、父子の情と、矢野が父光儀の自慢の息子であったことがよく伺える。

さて、矢野はこの年二度にわたって、憲政の設立を内閣へ上申したが、年が明けて明治十四年三月になると、かねてから矢野等が中心となり大隈と計って立案中の憲

政樹立の意見書が完成した。この意見書は、大隈重信の手によって、左大臣有栖川宮を経て、明治天皇の許へ奏上された。

この時、大隈や矢野は、この奏上について従前通りの単なる請願・奏議の認識しかなかったが、伊藤や井上等の内閣を経ずに手続きをふまなかったことから、改めてこの一件が政変にまつわる落とし穴につながるとは、夢にも想像し得なかった。

西南の役以来、政府の経済立て直しに余念のなかった大隈は、次第に政府部内に重きをなしていた。そして、大蔵省を牛耳ることになった大隈の勢力を恐れた薩長間、昨年内閣を分離することによって大隈を排斥した。大隈や矢野等は、この事を肝に銘じておくべきであった。

大隈に他意はなかったが、伊藤や井上等は、大隈が同僚の参議にも相談なく大臣を動かして、請願を直接天皇に奏上したことに不快の念を持ち始めていた。これは後日談だが、伊藤もこの意見書については気懸りであったのであろう。三条太政大臣に請うて、陛下のお手許よりこの意見書を借り受け一読する有様であった。この時伊藤は、大隈の意見はまだ時期尚早で急ぎすぎると思った

らしいが、この時点では内閣もさほど問題にならなかつた。だが、六月になると、世論を沸騰させる別の事件が起つた。北海道官有物払下げの事件がこれである。

明治四年当初、新政府は北海道開拓のため開拓使を置き、薩摩の黒田がその長官となつた。政府はこの北海道開拓に、明治五年から十四年に至る十ヶ年に限り、その費用として開拓に要する紙幣発行権を開拓使に与えたが期限のこの十四年になると、黒田中心の薩摩の勢力偏重に不満を持つ分子は、存続よりも開拓使の廃止を提案した。ところが黒田は、既に一千四百余万円を投資している開拓使の官有物を、わずか三十万円で、しかも無利息三十ヶ年賦という条件で、薩摩の五代才助等の率いる関西貿易会社に払下げようとしたから問題が大きくなつた。薩摩人同志で、官有物を私するとは何事ぞという世論が沸騰し、各地で演説会が行われ、各新聞社は一斉にこの無謀を書き立てた。

「馬鹿馬鹿しい。公金を何と心得ている。人民を馬鹿にするにも程がある」

熱血漢の藤田は、ぶつぶつ独り言を言いながら政府弾劾の草稿を練つた。後藤・板垣を初め、当時政府のご用

新聞であつた東京日日新聞で筆をとる福地源一郎まで集まつた。有名な新富座の演説会はこの時のことである。

政府もこの世論には抗しきれぬものではなかつた。そして、この難問題を先送りするため、天皇の東北・北海道の巡幸を発表した。大隈も天皇に供奉することになつたが、小閑を得た矢野は、久しぶりに夏休みを取り、故郷の佐伯へ帰省することにした。

この頃の佐伯は、郡制がしかれ初めての南海部郡連合町村会が、この二月に養賢寺で開かれ、佐藤がその書記長をつとめたが、三月には、青年有志七十余名が集まつて政治結社久敬社を組織し、佐藤が選ばれて社長となり三の丸や久部の堤（篠崎公園）で演説会を開いて氣勢をあげていた。そこへ統計院幹事兼太政官大書記官に出世した矢野の帰省とあつて、早速三の丸で演説会が開かれた。矢野は、立憲政体・国会開設の急務を説き熱弁をふるつた。

佐藤はこの時初めて矢野に会い、県下の政治状態を話しあつたが、佐藤自身は上京の意志があることを告げ、矢野も心よく引き受けた。帰郷中の矢野は暇を得ては魚

つりや狩猟に悠々自適の毎日を楽しんで来た。だが、この頃から東京では変な噂が立ち始めていた。

八月といえば暑い夏の盛りである。噂を気にした沼間、汗をふきふき血相を変えて報知社に乗り込み、藤田と膝をつき合わせていた。

「藤田、噂は耳にしていると思うが、矢野はいつ帰って来るのか」

「はい、噂は気にしていますが、まさか」

「そのまさかが危いんじゃない。矢野を直ぐ呼び返せ」

「そこまでせっぱつまっているとはー」

藤田は半信半疑であった。

「噂もいろいろあるが、今度の流言は只言ではないぞ」

官人あがりの沼間は、記者の藤田とは噂の感じ方が違っていた。

「政府部内では、矢野が肥後や日向に飛んで、政府を攻撃していると噂が流れている」

「まさかそのようなー」

「そこじゃ。単なる噂であり得ないとは思いますが、誰かが仕組んだ^{わな}罠ということもある」

「罠」と聞いて、藤田の顔色が変わった。

「部内では憲法の話まで聞いたがー」

「憲法」と聞いて、藤田は今度はうんと頷いた。

「よいか茂吉」

沼間はこう言って膝を乗り出した。

「大隈の意見書提出の裏には、福沢の三田派が一枚かんでいるとの専らの噂じゃ。無理からん話だが、開拓使の問題はどうじゃ。誰が考えても馬鹿馬鹿しい話だが、噂というものは、大隈や福沢が首頭を取って反対ののろしをあげ、政府を窮地におとし入れようとしている、ということになる。その背後には三菱の後押しがあると、まことしやかに話す奴がいる。その上ー」

「まだあるのですか」

藤田はあきれた顔をしていた。

「これからが大事じゃ。大隈はこの度の巡幸供奉の間に矢野を九州に帰し、政府顛覆を煽動させているとまで流言を流しているー」

「うん」藤田はうなづいて腕を組んだ。(なる程、話の筋書きがあっている)。今度は感心しだした。

「そこじゃ。噂は噂であっても、このままでは謀反人扱いにされるぞ」

「わかりました」

「謀反人」と聞いては、藤田もじっとしておれなかった。

「早速電報を打ちましょう」

「それがいい。何か胸騒ぎがするんじや」

沼間はどう言って、何か異変を肌で感じている様子であった。

矢野は八月の終わりに急拠東京へ帰って来たが、案の条、帰京すると直ぐ大藏卿の佐野常民に呼び出された。

「この度の騒動には心当りがあるう。内閣の間では君が九州に帰り、肥薩の間を潜行して各地の人心を煽動していると専らの噂である。在官の身でそのような事をしては困るではないか」

と、きつい叱責であったが、矢野にとっては全く寝耳に水の出来事であった。

「全く事実無根でございます。折角の休暇を戴き、魚をつつたり猟を楽しんだり、鋭気を養いながら、佐伯から一步も出たこともございません。調査すれば事実はすぐ判ることでございますが、それにしてもこの様な流言が

流されるとは」

矢野はむしろ不思議そうに首をかしげた。

「なる程。単なる噂にすぎないのか。それにしてもどこから出たものであろうか」

佐野大藏卿も納得した様子であったが、この噂は伊藤にも通じていた。

佐々木高行の日記八月二十九日の条には、

「さて伊藤の内話に、この頃大隈の内意は、方今の民権論へ同意いたし、只今の政府にてはとも見込無之との趣旨にて、枢密局外の者と相結び候趣、矢野文雄へ命じ、九州地方へ巡回の砌、その趣旨を申述べさせたる由肥後人より内通があった。これは三菱会社及び福沢諭吉と相計りたる由。実に悪むべきこと」

とある。この日記から察すると、流言は広く行われ政府を預る伊藤まで、この噂に迷わされていたことになる。果して、どこから出た噂であらうか。

大隈や矢野が政府の顛覆を計るなど言いがかりにすぎない。立憲政体や国会開設の方法にしても、急進と漸進の差こそあれ、伊藤や井上もその事は既に知っているはずである。まして矢野は、維新以来薩長に対して怨念が

あるわけではない。この頃では、むしろ政府まで巻き込んで、初志の貫徹を急がせたいと思っている。だが、政府にしてみれば、大隈によって憲法を認めさせられ、国会まで開設されるとあっては、政府の主導権は大隈によって握られることになる。薩長の有志はそれだけは避けたかった。政府部内で何かが動いていたのはそのためである。

矢野や藤田は、この時点では、流言も大したことはなからうと、たかをくくっていた。そして、巡幸の成功と大隈の帰京を心待ちにしていた。だが、巡幸が終わって大隈が帰京したその夜、事態は急変した。その間の事情は「大隈侯昔日譚」に詳述されているので引用することにする。

丁度明治十四年の十月十一日である。七十幾日間、先帝の供奉で、東北から北海道を巡って帰って来るとその間に政府では種々方策を廻らしたものと見えるが還った日の即夜内閣会議を開いて、わが輩を追放することを決し、何でも夜中の一時頃であったと思う。参議の伊藤と西郷（従道）とが、わが輩の所へやって来て、ただ単純な言葉で「容易ならぬことだから」と

だけで、どうか辞表を出してくれと云う。こちらは多くを聞かずとも、その間の消息は大概分っている。「よし明日わが輩が内閣に出る、辞表は陛下に拜謁してから出す」と云ったら、これには兩人一寸当惑したらしいが、すぐにこれを止めるわけにも行かぬ。然し、さすがにそれはいかぬと止めはしなかったが、わが輩が宮中に行った時は、もう門衛が嚴重に遮って入れさせぬ。有栖川宮・北白川宮とは御巡幸中同行でもあったが、有栖川宮様に行けば、やはりここにも門衛を置いて固く門をとぎし、わが輩の入るを拒絶すると云う始末、昨日まで供奉申し上げた陛下にも、御同行申し上げた宮様にも、今日は固めの門衛から拒絶されてお会いすることすら出来ないと云う。急転して体のいい罪人扱いとなってしまうのである。御免の辞令は司法卿の山田（顕義）が友人として持って来て渡してくれた。

これが明治十四年の政変である。こうして、大隈は一夜にして政府部内から追放され、政府の実権は再び薩長の有志によって固められた。その代り、問題の北海道官

有物払下げは取り下げとなり、新たに明治二十三年を期し、国会を開設するという大詔が渙発せられたが、大隈

輩下の矢野達も大挙して政府から身を退くことになり、時局は新たな局面を迎えることになる。

愚考古考学

中 林 幸 夫

(会員・佐伯市長島町)

鳥居 → 居 → 鋸

最近、農地改良工事のために各地で遺跡が発見された新聞記事が多い。

そして、集落群、○○宮跡等とことまかに古代の様子が大々的に書かれている。

私は以前からこのような記事を読むたびに不思議に思うことがあるので、こゝに愚考を述べてみたい。

それは、鉄器時代以前の石器時代(古墳時代)のことである。

先日、竪穴住居跡の柱の太さが直径二十五センチあったと発表されていたが、石器時代にかにして太い木材を思いの長さに加工したかの方法である。石斧・石刀石包丁等は発見されているが石鋸はあまり耳にしない。

現代人の我々の考えが古代人に及ばないかもしれない